

ハモコミ通信は①②と毎月2回、メール配信させていただいております。①のほうはホームページでも公開しておりますとおり、A4版1枚のペーパー版も作っています。何かを郵送するついでに同封するようにしています。

HP上のバックナンバーも、このペーパー版のみ都度公開しており、②のほうは1年分まとめたの公開とさせていただいております。

遅くなりましたが、2020年②特集、どうぞお楽しみくださいませ。

## ハモコミ通信 2020年 1月号②

<まちネタその1>

### ◎ 報告とお礼

Fさんは、人が生きていく上でとても大切なことを教えてくれた父に、感謝しています。それは、今から30年前、Fさんが大学入試に失敗した時に、父がかけてくれた言葉です。

入試の年の正月、Fさんは、学問の神様として知られている神社へ合格祈願のお参りをし、試験に臨む決意を新たにしました。

しかしながら、結果は、受験した3校とも不合格でした。

今後の考えがまとまらず、部屋で手持無沙汰にしていると、父が「神社にはお礼に行ったのか」と聞いてきました。

Fさんが黙っていると「たとえ不合格でも、報告をしてお礼を言いなさい」と言ったのです。

父は、結果がどうであれ、けじめとして、きちんと後始末をすることは、人としての務めであることを示したのです。

<不合格の時もお礼を言うのか>と思っていたFさんが、父の言葉の意味を理解したのはずっと後でしたが、今では人生の道標(みちしるべ)の一つとなっています。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<コメント>

受験生にとっては、今がまさに正念場ですね。仮に残念な結果だったとしても、頼みごとをしておきながら後始末をしないのは、人としての務めをおろそかにしている、という指摘ですね。確かに忘れがちな部分だと思います。

良かった時のお礼参りすらすっかり忘れてしまうことも少なくない中で、タイムリーな話題ではないかと思いました。

後始末をしっかりすれば心のモヤも少しは晴れ、次に進めることでしょうか。

<まちネタその2>

### ◎ 喜んで働く

勤続20年が過ぎ、職場内の様々な仕事に精通するIさんは、中堅クラス特有のマンネリを感じていました。

次の目標が見いだせずでした。

かつての先輩にIさんが心中を語ると、人の働き方には様々な段階があることを教えてくれました。

第一段階は我慢で、仕方なく働く状態です。

第二段階は怠慢で、要領よく働く状態です。

第三段階の不満は、慣れのため適度に働く状態です。

第四段階の打算は、収入を得るためだけの消極的な働きです。

第五段階の勤労は、努めて真面目に積極的に張り切って働く状態、というものでした。

先輩は「君はこの第五段階で留まっているのではないか」と言い、「働きそのものが喜び」(喜働)という最上の段階があることを教えてくれたのです。

仕事の技術は習熟しても、そのような心境に至っていなかったことを知ったIさん。

この日から新たな目標を得て自身の働き方を見直そうと決意しました。

仕事が楽しく、時が経つのも忘れるくらいの「喜働」を目指したいものです。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<コメント>

仕事は複合的なものですから、単純にその人の働き方を上記のように区分できるものではないかもしれません。

自分の内側に眠っていた「使命感」や「信念」「理想」「問題意識」などに目覚めた(気づいた)瞬間に、一気に第六段階に飛んでいけることでしよう。

その火付け役は、周囲の叱咤激励や仕事の中・外での体験、本、テレビのニュースなど様々でしょう。

求めているがそこに至ってないという方は、焦る必要はありません。

求め続けていれば必ず得られると思います。

~~~~~

#### < 編集後記 >

毎年恒例、仙台七福神巡りラン。

太白区鉤取にある鉤取寺(福祿寿)からスタートし、最後、藤崎百貨店の屋上にある恵比寿様でフィニッシュ。

そのルートのみをつなぐと約 16km のコースとなっており、ゲストを含んだ仲間 33 名と楽しく走りながら 1 年を祈願してきました。

## ハモコミ通信2020年 2 月号②

< まちネタその 1 >

### ◎ 仕事という作品

英語の「Work」という単語は「仕事・作業」と訳されますが、その他に「作品」という意味もあります。

私たちの日々の仕事は、自分自身が作り出し、自分しか作れない作品だと受け止めることができるのではないのでしょうか。

製造工場に勤めるAさんは、毎日の通勤でバスを利用しています。

決まった時間のバスに乗りますが、運転手は日によって異なります。

バス停に着くたび、運転手は「足元にお気をつけください」などと、お客様にやさしく声をかけます。

< バスのお陰で、毎日の通勤の移動が楽にできる >

と感謝しているAさんは、下車するたびに、「ありがとうございます」と必ず言うようにしています。

運転手は、「ありがとうございました。行ってらっしゃい」と返事をしてくれます。

こうした運転手の姿勢こそ、プロの仕事といえるでしょう。

Aさんは、「仕事は自分の作品である」という自覚を持って、お客様に喜ばれるものを作り上げていこうと感じています。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

#### < コメント >

日々の仕事を「作品」ととらえる。なんと素敵な発想でしょう！

仕事場に向かう時から(或いは目覚めてから)作品づくりは始まっていると言えるでしょう。

日々新たに自分の作品を生み出していく。

変なものは作れませんね。

心を整え、ポリシーをもって、ていねいに大胆に優しく明るく喜んでことにあたる。

そして、その作品は自己満足にはとどまってはおられず、手に取ってくれる相手が必ずいるわけですね。

どんな作品なら気に入ってくれるだろうか…。働き方の新しい発想が生まれそうです。

< まちネタその 2 >

### ◎ 言葉との出会い

不動産販売会社に勤めるIさんは、後輩社員の指導に頭を悩ませていました。

朝は遅刻を繰り返し、何度注意をしても、改善の姿勢が見られないのです。

そのようなある日、通勤の電車内で読書をするのが日課になっているIさんは、登場人物の発していた次の言葉に目を留めました。

「どんなに理屈や道理が通っていても、そこに思いやりの心がなければ正義とはいえない」

この文章から、後輩に対する接し方を振り返ったIさん。

正論を押しつけるのみで、思いやりの心で後輩の話を聞いていなかったことを反省したのです。

それからIさんは、積極的に後輩に話しかけたり、後輩の話に耳を傾けました。

すると、家庭の事情で遅刻せざるを得ない状況であったことを知ったのです。

その後、会社のサポートもあり、後輩の遅刻は徐々に改善していきました。

以降、Iさんは、思いやりの心を持って業務にあたるようになったのです。

恩師、上司からの励ましの言葉、書籍の一文など、これまでの人生で大きな影響を受けた言葉を人生の指針として、日々を充実させていきたいものです。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

#### <コメント>

たまたま時を同じくして、似たような話を耳にしました。

それは、4つの「日本人の美德」についてのお話です。

日本人の美德はたくさんあると思いますが、「次郎物語」の著者下村湖人氏（明治17年生まれ）によると「忍耐力」「謙譲」「調和」「勇気」の4つだそうです。

今や、すべて日本人の美德から消えてしまった、と言う人も出てきそうですが、それがそうではない、と日本人自らが気づいたのが東日本大震災でしたね。

本題から外れるのでその話をとりあえず置いておき、4つの美德に話を戻します。

下村氏によれば、この4つの美德、根底に”ある基本的なものがあること”が前提だそうです。

その基本的な土台がなくなる、あるいは弱くなると、途端に次のような「悪徳」に変わってしまうのだ、と。

「忍耐力」⇒「怨恨（えんこん）の源」、「謙譲」⇒「卑屈」、「調和」⇒「安易な妥協」、「勇気」⇒「粗暴」

なんとなくわかりますね。

では、その基本的なものとはいったい何なのか？

それが、相手への思いやり、愛、なのだそうです。

話が長くなりましたが、やっとコラムとつながりました(笑)。

愛のないイデオロギーは危険なナイフ、ということと共通で、いろいろなことに置き換えられそうな話ですね。

弊社の7つの行動指針の6番目は、「お互いを思い遣い ONE TEAM」。

本当は1番目にしたほうが良かったのかもかもしれません

~~~~~

<年に1度の『倫理経営講演会』集客ピンチです(苦笑)>

開催目前なのですが、満席に遠く及ばず、8割ほどとなっています。

近隣の方は、ぜひ、足をお運びくださいませ！講師は無名でも、内容は折り紙付きです。

今回、お二人の講演テーマは違いますが、お二人とも、すごい苦難を乗り越えて今に至っていらっしゃるようです。

苦難はなるべくなら避けたいというのが普通の考え方ですが、倫理法人会では、その乗り越え方を学んでいます。

しかしそれを本当にちゃんとできるかどうかは本人の心次第。

HOW TO ではないリアルな体験談。

受講される方々一人ひとりに必要なヒントがたくさんちりばめられていると確信しています。

もちろん経営者じゃなくても参加できます。

直前ですが、ご一報ください。お待ちしております！

■講師：浅野洋一様

(一社)倫理研究所法人スーパーバイザー  
株式会社大東 代表取締役

テーマ：「大転換 — いま求められる心の経営 — 」

全社員が仕事納めの日に退職するというショッキングな出来事を経て、3年経たずに顧客が戻ったという経験をお持ちです。

原因はすべて自分にあること、喜んで苦難に立ち向かう決心をしたこと、それが打開の道だった、ということです。

■事業体験発表：三瓶利正様

福島県倫理法人会相談役  
株式会社アイコン技研 代表取締役  
テーマ：「71歳の起業」

新モーターの開発がうまくいかず（32回失敗の連続）、自殺を決意した矢先、ある計算式がパッと浮かんだそうです。

人のアウトプットは今背中に何を背負っているかで決まる、とおっしゃる三瓶氏の夢は、103歳で誕生パーティをやること。

■日時：令和2年2月17日（月）18時半～20時半（受付18時～）

■会場：AER6F セミナールーム2  
仙台市青葉区中央1-3-1

■参加費：たったの2000円！  
講師を囲んでの懇親会もゲストは2000円！

■申込先：仙台広瀬倫理法人会事務局  
<https://sendaihirose-rinri.net/>  
お名前、所属先名、電話番号、メールアドレスを記載して下記までお申込みお願いいたします。  
（このメールに返信でもOK）  
E-mail：hirose@rinri-miyagi.com  
TEL 022-217-0057 FAX 022-217-0115

~~~~~

#### < 編集後記 >

最近、SDGsのバッジを襟につけている人をたくさん見かけます。

一般的なものは金属製ですが、木製のものもあるんですよ。

しかも南三陸町のFSC認証山林から伐り出された南三陸杉製です。

1650円也。「SDGsとうほく」で検索してみてください。

#### ハモコミ通信2020年3月号②

<まちネタ>

#### ◎ 支払う時の心持ち

A氏は、実家を離れて大学に通う息子から、仕送りの追加を要求されることがあります。毎月の一定額の仕送りでは足りないことがあるようで、息子から連絡がある度に小言を言いながら送金していました。

しかしある時から、《子供が一人前になるためには必要な投資だ》と気持ちを切り替えて、小言を辞めすぐに送金するようにしたのです。それから数カ月後、息子からの要求がないことに気づいたA氏は、その理由を聞いてみました。息子は、「以前は電話で文句ばかり言われていたけれど、ある時期から励ましに代わり、何となく申し訳ない気持ちが湧いてきた」と言います。以来、アルバイトと両立しながら、勉学に努めていることを知ったのです。

誰でも金銭を稼ぐ喜びはありますが、支払う時は渋ってしまうものです。しかし、喜んで支払うことで、結果は変わってきます。払うべきではない金銭を拒否するのは勿論ですが、払わなければならない状況であると見極めたならば、気持ちよく支払いたいものです。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

#### <コメント>

しぶしぶ支払うのと喜んで支払うのと、その心持ちによって何かが変わるっていう発想は以前の私にはありませんでした。

しかし、「払う時は、喜んで、すぐに」という言葉に接して以来、喜んですぐに支払うようにしてきました。

出金と入金、駅の改札口のようなもので、入る時も出る時も同じ気持ちでいることが良い、のだそうです。

そもそも支払わなければならないことをずーっと気にかけるわずらわしさがなくなりますし、相手にとっても早いほうありがたいはずですよ。

相手もハッピー、こちらもハッピー。

やってみるとわかりますが、すがすがしい気分になります。おすすめですよ(笑)。

<まちネタその2>

## ◎ 販売員と乗客の関係性

営業職のKさんが特急電車に乗った時の出来事です。左後ろに座っていた乗客が車内販売員を呼び止め、車内ワゴンから飲み物を選びました。

販売員が「お支払いは現金ですか、ICカードですか」と尋ねました。

乗客は「どちらのほうが処理しやすいですか」と販売員を気遣う言葉をかけたのです。

販売員は乗客の気遣いに恐縮しながらも

「本日は混みあっておりますので、ICカードですとスムーズにお支払いいただけて助かります」と答えました。すると、お互いに笑顔がほころび和やかな雰囲気となったのです。

Kさんは驚きました。《 買い手は対価を払うのだから、丁寧な対応やサービスを楽しむのは当然で、あくまでも売り手が気遣う側 》と考えていたからです。

これまで「私は客だ」と言わんばかりにぞんざいな対応をしていたことに深く反省したのでした。

この一件に遭遇してから、Kさんは、《 客の立場であっても、売り手の立場を気遣えるようになりたい 》と決意したのでした。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

### <コメント>

私もかつて、俺様はお客様だ、的な心がいっぱいありました。

今でもまったくないかと言われるとまだ少し残っていそう（苦笑）。

逆の立場になるとすぐわかるんですね。そういう意味で、弱い立場に立つというのはとてもいい修行です。

気をつけないと、より弱い立場の人に横柄になる、という負の連鎖を起こしてしまいます。

弱い立場に立ちながら、なおかつ、負の連鎖を断てる人が、世の中を明るくしていくのでしよう。

~~~~~

### < 編集後記 >

新型コロナウイルスの影響で震災9年という節目をじっくりふり返ることができなかった人もいらっしゃると思います。

さて、その節目にあたり、編集後記には少し長くなりますが、気仙沼の愛読者様からいただいたメールに、さすが直接の被災地の人とは違うな、と感じたので紹介させていただきます。

掲載についてはご本人の了解は得ております。

また、お人柄を察していただく意味で、ハモコミ通信（前号）の感想も併せてそのまま掲載させていただきました。



今回のハモコミもうなりながら拝見させていただきました。（毎回うなりながら拝見しています）

イチローさんの姿勢、発する言葉は、どれをとっても模範ですよね。

野球中継でホームランを打った時にバットを高く放り投げて打球を目で追う選手がいますが、イチローさんのことを知った後では、ただの挨拶を欠いた選手にしか見えなくなってしまいました。

紙タバコをクチュクチュしているのは百歩譲って許すにしても、グラウンドに唾を吐きだすのを見ると、子供たちのあこがれなので、せめて楽天の関係者の方々には礼儀正しくと指導してほしいと思ってやみません。

今年も3月11日がやってきますね。

私は毎年市内にある徳仙丈山に登って、国の慰霊祭をラジオで聞きながら、君が代を斉唱して天皇陛下のお言葉を聞かせていただいています。

今年は午前中に墓参りを追加しようと思っています。

国の慰霊祭は中止となったようですが、亡くなった方々に思いをはせながら、自分が行わなくてはならないことを少し考えてきたいと思います。



## ハモコミ通信2020年4月号②

### <まちネタその1>

## ◎ 変わるものと決して変わらないもの（国際コミュ

## オン学会名誉会長鈴木秀子氏のコラムより抜粋)

(前略)

『荒城の月』を読みながら、私が感銘を受けるのは、私たちが生きていく世界には常に変わっていくものと変わっていかない不変のものがあり、短い詩の中にその対比がくっきりと表現されていることです。

私たちは必死になって地位や名誉、財力などを求めようとしますが、同時に心の奥深い部分ではその儚（はかな）さをよく知っています。

そういうものは持続しない、いつかは必ず消えていくと知っていながら、なおそれを求めようとする。

人間は誰しもそういう一面を持っています。

一方で、大自然の運行や秩序はどんなに時代が移ろうが変わることはありません。

朝が来れば夜が訪れますし、日本のような温帯地域では春夏秋冬の四季が常に巡ってきて、四季折々の草花や食べ物を楽しむことができます。

太陽の光は無限に降り注ぎ、生きる上で必要な水も空気も無条件に与えられています。

ものごとが様々に移り変わる儚い人生の中にあっても、それを慈しみ深く包み込む大自然の秩序は常に完全であり、調和そのものなのです。

『荒城の月』に盛り込まれた美しい桜や松のざわめき、霜の色、雁（かり）の鳴き声、天上の月の光、風の音などは、そういう変わることのない大自然の象徴として描かれています。

考えてみれば、私たち人間の命そのものも大自然によって与えられたものであり、私たちはそういう大自然を形づくっている存在の一部です。

しかし、大いなる存在の意思によって生かされているながら、そのことを忘れて、いつも我欲にとらわれ、喜怒哀楽にどっぷりと浸かって生きているのが私たち人間の偽らざる姿だと言えるかもしれません。

中には「人間はいずれ死んでしまうのだから、好き勝手に生きて思う存分人生を謳歌（おうか）しよう」と享樂的な生き方を選ぶ人もいます。

大自然から生かされていることもすべて忘れて、刹那（せつな）的に生きたとして果たしてそこに最後には何が残るのでしょうか。

すべてを失ってしまった時、そこに残るのは空しさ（すさ）んだ気持ちだけです。

(中略)

(この後、糖尿病で失明した事業家の話が続きまして…)

それまで社員を頼りなく思い、時に厳しく怒鳴りつけたりすることも多かっただけに、失明後、会社に足を運んだ自分が社員たちからどのような目で見られるだろうか、冷やかな態度で向き合ってくるのではないかと、不安でいっぱいだったといいます。

ところが、男性が出勤すると、社員たちは待ち構えていたかのように出迎えて手を貸し、次々に温かい励ましの言葉を掛けてきました。

それまで頼りなく見えて散々怒鳴りつけた社員たちが、その後も変わることなく「これからは社長の代わりに自分たちが頑張りますから、安心してください」と伝えてくれる姿に接し、男性はそれまでに味わったことのない人のありがたさ、温かみというものをしみじみと実感するのです。

『荒城の月』の詩になぞらえれば、荒れ果てた城に、月の光がどこまでも注がれるようなものです。

男性はいつも月の光に照らされながら、そのことに気づくことができないでいたわけです。

(中略)

人生で起きることには必ず意味がある。

このことは私の確信ですが、この男性の場合も失明という大きな試練を通して、それまで気づかなかった世界に目覚め、人生でより大切な宝を得ることができたのです。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<コメント>

新型コロナウイルスの影響を大きく受け、今まさに試練の真っ只中という方も多くいらっしゃるでしょう。

著者は、ご自身の確信として、「人生で起きることには必ず意味がある」と力強く語っていらっしゃいます。

私もまったく同じとらえ方をしており、特に、何か不都合な出来事が起きた時には、心静かに問うようにしています。

「この意味は何だろう？何を諭そうとしているんだろう」と。

さて、このコラムを読んで、『荒城の月』に興

味を持たれたのではないのでしょうか。  
お時間のある方は以下もお読みください。  
『荒城の月』の詩とその現代語訳です。

春高樓の花の宴  
巡る盃かげさして  
千代の松が枝わけ出でし  
昔の光いまいずこ

秋陣營の霜の色  
鳴きゆく雁の数見せて  
植うる剣に照りそいし  
昔の光いまいずこ

いま荒城の夜半の月  
替らぬ光たがためぞ  
垣に残るはただ葛  
松に歌うはただ嵐

天上影は替らねど  
栄枯は移る世の姿  
写さんとてか今もなお  
嗚呼荒城の夜半の月

#### 【現代語訳】

春、城内では華やかな花見の宴が開かれている。  
回し飲む盃に月影が映る。  
千年の古い松の枝から射し込んでいた、栄華を映した光は、いまどこにあるのだろうか。

秋の古戦場を一面霜が覆う。  
空には雁の群れの鳴き声が響く。  
城跡に刺さった刀に映っていた栄華の光は、いまどこにあるのだろうか。

いまは荒れ果てた城跡を照らす夜半の月。  
昔と変わらぬその光は、主のいない城で誰のために射しているのだろうか。  
石垣に残るのはただ一面の蔭。  
老松の枝を鳴らす風の音が聞こえるのみ。

天上の月が照らす影はいまも変わることがないが、世の中は栄えては滅んでいく。  
いまもなおそのことを映そうとしているのだろうか。  
ああ 荒城を照らす夜半の月よ。

実に味わい深いですね。

そしてこの唱歌を元にこのコラム！  
さすが鈴木秀子さん。恐れ入りました。

~~~~~

#### < 編集後記 >

弊社も鳥取市役所をお手本に社員のデスク境に透明ビニールの壁を設けました。  
加湿器で次亜塩素酸水の噴霧なども始めました。

さて、普段商売っ気のまったくないハモコミ通信ですが、さすがにこの時期、マスク需要がたくさんあり、困っている方のために情報提供させていただきます。

なお、日にちについてはあくまで現時点での情報であり、刻々と変わっているのでご要望の方は都度お問い合わせいただければ幸いです。

大人用マスク（2500枚単位）⇒4月30日大阪出荷予定（単価税別60円）

大人用マスク（500枚単位）⇒5月11日埼玉出荷予定（単価税別75円）

子ども用マスク（500枚単位）⇒4月21日埼玉出荷予定（単価税別75円）

詳細はお問い合わせくださいませ。

## ハモコミ通信2020年5月号②

< まちネタその1 >

### ◎ 明日の仕合わせ

（小山薫堂氏のコラムより）

「幸せ」という言葉は、そもそも「仕合わせ」と書いていたらしい。

仕合わせとは、「～し合わす」が変化したもので、わかりやすくいうなら「巡り合わせ」を意味する。偶然巡り合うことで生まれる感情だとするなら、

そもそも「しあわせ」という言葉には、いい意味と悪い意味の両方が含まれていたに違いない。

もしくは悪いことに巡り合った時、それを乗り越えた際に芽生える喜びを「しあわせ」と表現したのかも、と勝手に解釈している。

末永幸歩さんという美術教師が書いた『13歳からのアート思考』という本におもしろいエピソードが載っていた。

岡山の大原美術館でモネの『睡蓮』に見入っていた4歳の男の子が、突然作品を指差してこう言ったそうだ。

「かえるがいる」

モネはかえるなど描かないのでその場にいた学芸員が

「どこにいるの？」と尋ねたところ、男の子はこう答えた。

「今、水にもぐっている」

男の子は見えないものを想像し、価値を作り出したのだ。

著者の末永先生は、このように自分だけのものの見方で作品をとらえ、自分なりの答えを手に入れる行為こそが本来のアート鑑賞なのだ、と綴っている。

すばらしいと思った。

そしてこの正しい鑑賞スタイルは美術界以外でも役に立つ気がした。

目の前にある「今」をどういう視点で見つめ、そこからどういう自分なりの答えを手にするのか？

それはまさに企画を作るという行為に等しい。

4歳の男の子がモネの作品の中にかえるを見つけたように、私たちは新型コロナウイルスの脅威という現実を鑑賞して何を見つけられるだろう？

ただ不安になったり、怯えたり、怒ったり、悲しんだりしているだけでは悔しい。

この苦難を乗り越えた時に訪れる「仕合わせ」を信じて、明日を待ちたい。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

#### <コメント>

いろいろな状況、立場にある人がいらっしやる中で、どういうコラムを選び、どんなコメントをするか、そのむずかしさは毎回感じます。

今はやはりこれ（新型コロナウイルス）を避けては通れません。

著者は「この苦難を乗り越えた時」という中の「乗り越える」をどんなイメージで使ったの

だろう、と想像してみました。

じっとただ過ぎ去るのを待つのではないことは明らか。

「企画を作る」ということをわざわざ書いているのだから、積極的な取組みを促しているわけです。

しかし、必ずしもそうできない人やそれどころじゃないという人に配慮して直接的な表現を抑え、「仕合わせを信じて明日を待つ」としたのかな、と。

コラムを書く人も、一方的に自説を展開すればいいわけではないということを感じさせられました。

新しい生活様式なるものの一部は、確実に定着していくとみます。

そこに沿った暮らし方、仕事の仕方、そして心の持ちようも、なにがしかの工夫がとてとても必要だと感じています。

~~~~~

#### < 編集後記 >

オランダ在住の知り合いの女性が、マスクを手縫いするため、日本のWEBサイトで型紙をダウンロードして作ったそうです。

そうしたら、鼻の高いご主人には合わなかったらしく、結局自分で型紙を作ったと言っていました。なるほどね。

オランダの情報は日本のテレビニュースではほとんど取り上げられてませんが、収束傾向にあるものの、毎日50人くらい亡くなっているのだそうです。

#### ハモコミ通信2020年6月号②

#### <まちネタその1>

#### ◎ 為せば成る

「心頭(しんとう)滅却(めっきゃく)すれば火もまた涼し」という諺があります。

当たり前のことですが、実際に、火や炎が涼しいというわけではありません。

「無念無想の境地に至れば、火さえも涼しく感じられる」ということから、「心の持ち方一つで、いかなる苦痛も苦痛とは感じられなくなることを意味します。

つまり、この言葉の根底には「だから、気概と意気込みを持って生き抜いていくことが大切である」というメッセージが流れているのです。

それは、単なる思い込みや痩せ我慢というレベルではなく、本来、人に備わっている難局を突破していくための「覚悟」という潜在力を指しています。

先人たちは、幾多の困難や危機的状況を乗り越えてきました。

「いかなる事態であっても何とかする。絶対よくなる。大丈夫」という、明朗な覚悟で、希望を旗印に掲げて難局を切り抜けてきたのです。

不確実で不安定な時代だからこそ、希望を持つことが大事です。

強い気構えと勇気を持って、どんな困難をも切り開いていきましょう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

#### <コメント>

無念無想という境地はそもそもなかなか得られるものではないと思われていますね。

しかし、例えば

美しい夕焼け空に見入っている時、  
雨上がりの虹を見つけて心奪われている時、  
何かひとつのことに集中して取り組んでいる時、  
誰かのために一生懸命になっている時、

そういう一瞬一瞬の中に、自我のない無念無想状態があると言われています。

また、コラムにあるように、覚悟が決まった時、普通以上の力が発揮されることは体験されていらっしゃる方も少なくないでしょう。

「火事場の馬鹿力」などはまさにそれですね。

か弱い女性が重いタンスを動かして我が子を助けた、などという話は確かに聞きます。

15年くらい前に火渡りを経験しました。

裸足で15mほど焚き火の上を歩いて渡るので

す。  
絶対できると心が決まった時、不思議と熱く感じないのです。

逃げ腰で「氣」が入っていないと火傷するそうです。

人によって状況がまったく違うと思いますが、このコラムで言っている「明朗な覚悟」を持って、「with コロナ」「自粛から自衛」という新しい時代をそれぞれの気概で乗り切っていきましょう。

#### <まちネタその2>

#### ◎ 昨日より美しく

明日ありと 思う心の あだ桜 夜半に嵐の  
吹かぬものかは

これは親鸞聖人が松若丸と呼ばれた、幼少期に呼んだ歌です。

弱冠9歳で作ったこの歌からは、今できることは今やるという、作者の人生観が伝わってくるようです。

N子さんがこの歌を知ったのは、30歳を過ぎた頃でした。

事務職に就き、日々、漫然と過ごしていた自分を恥ずかしく思ったと言います。

これをきっかけに《親鸞聖人のようにはなれなくても、せめて今日1日だけでも悔いなく生きたい》と考えたN子さん。

「目の前の気がついたことから改善していこう」と決心したのでした。

まず、「今日できることは今日やり、昨日より少しだけ前進する」という気持ちで次のことに取り組みました。

それは、「お礼の手紙を書く時は、字をより丁寧に書く、職場の共有物を昨日よりも、きれいになるように磨く」などです。

現在は、より充実した毎日になったと、N子さんは笑って語ります。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

#### <コメント>

9歳からこういう姿勢でやり続けていくと、大人物になれそうな気がします。

私は漫然と過ごしてきましたが(笑)。

もっともN子さんのように、たとえ何歳だろうと、やればやっただけ変わるの間違いはない

こと。

やるかやらないか、やり続けるかどうか、それだけで大きな違いが出てきますね。

故・野村監督は「努力に即効性はない、しかし努力は裏切らない」という名言を残していらっしゃいます。

このコラムはわかりやすい具体例が2つ挙げているのがミソです。

なるほど、そういう身近なことなら自分でもできそうだな、と思わせてくれますものね。

新たに始めることももちろんですが、途中で投げ出してしまっていることはありませんか？

やらない理由名人にならないよう、注意していきましょう(笑)。

### < ブックレットプレゼント >

たまごの殻に絵を描くエッグクラフトの出前講座を全国的に展開していらっしゃるえっぐおじさんをご存じでしょうか？

本名は菊地克三さん。

先日名取市にあるえっぐおじさんのアトリエを訪ね、おびたしい玉子の殻とたくさんの作品集を拝見してきました。

前回プレゼントとさせていただいた「こころがハッピーになる魔法のたまごのおはなし」3作目の中には、本当に心がほっこりするエピソードに溢れています。このアトリエからもその雰囲気伝わってきました。

そしてえっぐおじさんからとっても素敵な話を伺ったのですが、「こころがハッピーになる魔法のたまごのおはなし」2作目にそのことが詳しく書かれていました。

残り3冊となったその貴重な2作目の1冊を頂戴し、コピーをしてプレゼントする許可をいただきました。

心温まること間違いなし、ぜひ遠慮なくお申し込みくださいませ。

なお、前回同様、併せてドトールコーヒー創業者鳥羽博道氏の「起業の精神 人の幸せをつくる商いの道」(2枚組)もプレゼントします。

若き鳥羽氏は、決意を秘め、40日間船に揺られ、ブラジルでの珈琲修行をスタート。

あの安くて美味しい珈琲誕生の陰には、氏の純粋崇高な心と並々ならぬ努力が・・・。

~~~~~

### < 編集後記 >

状況が良い時に明朗でいることは誰にでもできます。

一方、状況にかかわらず明朗でいることには、それなりの覚悟が必要です。

笑う門には福来たる、どんな状況だとしても希望を持って進む人を、天が応援してくれないはずはないと信じています。

赤毛のアンの言葉を最後に紹介します。

『曲がり角のむこうに何があるか、今はわからないけれど、きっとすばらしいものが待っていると信じることにしたわ』

## ハモコミ通信2020年7月号②

### < まちネタその1 >

### ◎ コントロール

「自分がコントロールできること、できないことを分け、できないことに関心を持たないこと」

これは、日米の野球界で活躍した松井秀喜氏の言葉です。

松井氏はまた、「相手投手のどういうボールを待ってどう仕留めていくか。それは基本的に僕自身に決定権がある。そのためには心も体もコントロールすべく努力していました」

とも述べています。

日々の生活の中で私たちには、自分でコントロールできるもの、できないものがあります。

例えば、自分の顔形は簡単に変えられませんが、表情をより明るく変えることはできます。

年を重ねると若い時のように走れませんが、適度な運動によって筋肉をつけ、足腰を鍛えることはできるでしょう。

自分では変えられないことをいつまでも煩(わずら)わっているのは、未来を開くことは決してできません。

「今、自分にできることは何か」をまずは発見してみませんか。

発見できたら、早速実行に移しましょう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<コメント>

今の時代にピッタリな話題だと感じました。  
どこまでがコントロールできる範囲かは、人によって違うでしょう。

例えば、香港の民主化。

私はコントロール外だと思っていますが、そうではない、という方もいらっしゃるかもしれません。

例えば、政府や東京都のコロナ対策。

これも私にはコントロールできません。都民じゃありませんし、少なくとも、もっと他にコントロールすべきことが山積みです。

同じコロナ対策でも、自分自身のコントロールについてなら、日々の体調管理、衛生管理、中長期的に免疫力を高める生活習慣、必要と思われる情報収集による「正しく恐れる」暮らし、など。

また、近所のお年寄りが公園の草むしりをやってくださっている時に、「ごくろうさまです、ありがとうございます」と声をかけるのはコントロールできます。

仕事面では、各分野での様々なアイデア溢れる取り組みが、連日のように報道されています。実に励まされますし、参考になります。暗いニュースは心が暗くなるだけです。

どんなニュースソースを取り入れるか、こちらに決定権があります。

あとは、どう取り入れるか。

「今置かれている環境は、何かのメッセージかもしれない、と受け止めて、ピンチをチャンスに変えてやろう」

そんな前向きなコントロールを試みる人が増えていったら、世の中、必ず良くなっていきますね。

コラムにあるように、即行力も今改めて試されていると思います。

ここだ、これだ、と思ったら即行動していきましょう。

<まちネタその2>

## ◎ 受け止め上手

充実した仕事をするには人間関係を円滑にして、

信頼を得ることが大切です。

Aさんは所属する部署の定例会議で、毎回、自分の提案を聞き入れてもらえないことに不満を感じていました。

ある日、その思いを先輩に相談したのです。

すると先輩は、「君は意見を言う時、『いや、そうではなくて』『でも』『しかし』と、他の人の提案を否定して発言することが多くないかな」

と指摘されました。

Aさんは言い当てられて気まずくなり、俯（うつむ）いてしまいました。

先輩は続けて、「受け止め上手になるといいよ。誰でも自分の案を否定されると、嫌な気持ちになる。相手の気持ちを受け止めてから自分の意見を言うようにすると、君の提案も聞いてくれるよ」

とアドバイスしてくれました。

他人に対して配慮に欠けていたことを反省したAさん。

それからは「なるほど」「確かに」「そうですね」と、相手の意見や気持ちを受け止めてから、「実は」「だからこそ」と、提案するようになりました。

今では提案も少しずつ通るようになり、人間関係も良好になったAさんです。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<コメント>

受け止め上手、というのは実は得意不得意どちらも感じています。

というか、最近自信をなくす出来事が重なり、実は不得意なんだなと思い始めているところです。

意識している時はいいのですが、何気なくやっている時は、自分のことに意識が集中しすぎて、相手がどう受け止めるか、について、頭が回らないことが少なくありません。

心の動きよりも、業務の流れ、全体としての結果達成などに注意が集中してしまうからだ、と改めて気づかされます。

ずいぶん前に宮城大学の科目履修生となって学んだ「図解コミュニケーション」というのがあります。

図解をつくることは、図で考えること。論理が鍛えられます。

おかげさまでこちらはかなり得意になりました。

では、人の心の機微を感じ取ったり、受け止

め方を鍛えるには？

謙虚になることかなあ。初心に帰って。

コラムにあるような「なるほど」「確かに」「そうですね」「実は」「だからこそ」、っていう言葉の力を借りるのも良さそう。

どなたか、いい答えがあったらぜひ教えてくださいませ。

~~~~~

#### < 編集後記 >

友人が、ねこブーケいぬブーケという実に面白い切り口でフラワーアレンジメント事業を立ち上げました。

大好きなねこちゃんわんちゃんに、時にはお洒落をして思い出づくりいかがですか？というコンセプトのようです。

興味のある方は、『dot Saku』で検索してみてくださいませ。

## ハモコミ通信2020年 8月号②

### < まちネタ >

#### ◎ 母とコロッケ

あれは小学四年、夏休みのことである。

もう50年も前のことなのに今でも私はコロッケを見るたび母を想う。

あのひるめし時、無言で耐えてくれた母の姿から、私は大きな教訓を学んだ。

業界で、「あいつは口の堅い男」と私を評価してくれる向きもある。

だとすれば、母の教えが現在も生きているのである。

戦前の食生活、それは貧しい、の一語に尽きる粗食だった。

カツ、コロッケ、バナナなど、いま常食になっているものさえめったに食卓にはのらなかった。

麦飯に漬物、これが農村の年間メニュー、現代のヤングには理解しがたい一面であろう。

貧乏だったわが家もそれ。

私は、その日のことがあるまでコロッケに大き

な願望を抱いていた。

「一度でいいから食ってみたい」と。

その日、私は街に用事のある母に連れられて一緒した。

帰り道のこと肉屋の前にさしかかると、いい匂いが漂ってきた。

見ると、コロッケを揚げている。

「かあちゃん、コロッケ買って！」

私はほとんど衝動的にせがんだ。

母は私をチラッと見ながら、

「そんなムダ遣いしたら父ちゃんに叱られるじゃないか。さ、帰ろ」

と私の手を引いて行きかけた。

「いやだあ、一回でいいからコロッケが食いたいよ、かあちゃん」

この声に母の足が止まった。

私の顔をのぞき、その視線を店先へ移した。

「清次、そんなに食いたいのかい？」

「うん。学校で食ったことのないのはオレだけなんだもの」

「……」

母の思案している気持ちが、つないでいる手の温もりを通して私に伝わった。

「コロッケなんか買ったら父ちゃんの雷が落ちるんだから。母ちゃん知らないよ」

そういう母だったが、足はもう店頭へ歩きはじめていた。

その日のひるめし時がきた。

母と5人兄弟が膳につき、父も座りかけた。

私は、コロッケが食べられる幸福感と、起こるであろう父の怒りへの恐怖が入り交じって、体を堅くしながら食卓と父を見比べた。

「なんだ、このお菜は！」

膳を見るなり父の怒声が母へとんだ。

食卓には、コロッケの盛られた皿と漬物が山盛りの大ドンブリが並んでいる。

私は反射的に母を見た。

清次がうるさく言うから仕様なく、の母の言葉が当然出ると覚悟した。

だが、母は無言、うつむいたままだ。

「……」

「何て考えなしの買い物をする！メザシでも買ったらよかったのに。こんなぜいたくする銭は、うちにはねえ」

父は声を荒げて母をなじった。

うつむいたままの母が言った。

「いくら貧乏してたって、たまには他人様の子が

食ってるもんぐらいは食わして……」

小声で語尾は聞き取れなかったが、私のことはおくびにも出さなかった。

父はなおくどくど言い募ったが、その後の母は視線を膝に落とし口をつぐんだままだった。

途中から、私は母にむしゃぶりついていきたい衝動が、心いっぱいにあふれてきた。

「かあちゃん、ありがとう」と。

父の怒りもやっと静まり、みな箸を取った。

生まれて初めてのコロッケのうまかったこと。

あの味覚はいまも鮮明におぼえている。

食事は終わった。

「みんな、うまかったかい？」

母は優しいまなざしで私らを眺めながら聞き、視線を私にとめて言った。

「清次、うまかったろ！」

母の目が、笑っていた。

この小さな出来事は単に忘れられないにとどまらなかった。

私の成長につれ、出来事もまた心の奥で発酵し、熟成し、現在、私の処世に欠くことのできない美酒となって芳香を放っている。

子供のころは、かあちゃんが黙ってくれたので叱られずに済んだ程度にしか考えなかった。

だが、年が経つにしたがって、出来事は深さも重さも増してきた。

“告げ口はすべきでなく、相手の側に立って、言う言わないを決める。

これが信頼の基本だ”というふうになってきた。

結婚し、子を持ってみて、“無言”の大切さは身に沁みて心に根付いている。

「清次、うまかったろ！」の母の一言は、私にとってどんな名曲を聴くより感動的な響きを秘めている。

まもなく還暦を迎える今でも、コロッケを見るたびに、無言の母の姿がまぶたにくっきりと浮かび、胸を熱くするのである。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<コメント>

イエローハット創業者で、NPO 法人「日本を美しくする会」の創唱者で相談役である鍵山秀三郎が、講話の中で引用してくれたお話です。

昭和初期の貧しかったころの日本が背景にあるお話であり、エッセイ自体はおそらく30年以上前に書かれていますから、文中の50年前

は現在から80年以上前のことと推定されます。

このかあちゃんのような人たちの存在が、こころ豊かだった日本の象徴と言えるでしょう。

そして、この話、これだけでも十分心が洗われると思いますが、実は別のところで、もう一つ大切なことが語られていたそうです。

それは、コロッケのある食卓を見た父親がどうして怒りを鎮めたか、についての描写。

◆

ひとしきり、無駄遣いをした母親を責めた父親があることに気付くのです。

子供5人と夫婦2人。

コロッケは、7つになるはずですが。

しかし、皿に盛られたコロッケは、6つしかありませんでした。

母親は自分の分を買ってきてはいなかったのです。

それに気づいた父親は、無言で一つのコロッケを二つに分けると、半分を母親の皿に乗せたのです。

それを合図に子どもたちもコロッケにお箸を伸ばしたのです。

◆

地震雷火事親父。

良い面、悪い面、両方あったと思いますが、父親という役割がハッキリしていて、わかりやすい時代。

怒りの中でも、コロッケの数に気づき、そつと2つに分けて妻に半分を分けた夫。

なんとも昭和ですね。

お盆につき、こんな話で卓を囲んでいただけたら、と思いました。

~~~~~

< 編集後記 >

童謡メンタルセラピー創設者で長野大学教授の山西敏博氏によると、今や小学校で習う童謡の数は、私たち世代(50代後半)と比べると半分以下に減っているのだそうです。

童謡は、心に深く沁み込んでいて、認知症の人の脳も活性化することのこと。確かにそうでしょうね。

暑さだけにフォーカスするのではなく、昔の良いところにも心を寄せたいと思いました。

## ハモコミ通信2020年9月号②

<まちネタその1>

### ◎「消えたダイヤモンドの首飾り」(鈴木秀子氏のコラムより)

『女の一生』で知られるフランスの作家ギ・ド・モーパッサン(1850~1893)に『首飾り』という短編小説があります。

とてもシンプルな内容なので、まずはそのあらましからお伝えしたいと思います(原典は『モーパッサン短篇集』山田登世子編訳/筑摩書房による)。

この小説の主人公・マチルドは、文部省の小役人ロワゼルと結婚した主婦です。

幼い頃からあらゆる贅沢をしたいと思って生きてきた彼女でしたが、結婚後は貧しくみじめな生活が待っていました。

みずぼらしい住まい、粗末な椅子、汚らしいファブリック(織物)…その一つひとつが彼女には苦しみと怒りの種であり、贅沢な生活を夢想しては心を慰めるのでした。

ある日、ロワゼル夫妻は役所のお歴々が参加する華やかな夜会に招待されることになりました。

しかし、彼女は浮かぬ顔をしています。着ていくドレスがないというのです。

ロワゼルは猟銃を買うために貯めた400フランで立派なドレスをこしらえてあげましたが、それでもマチルドは「つけていく宝石がない」と思い悩んでいます。

二人はふと金持ちのフォレストイエ夫人の家に行き高価な宝石を借りることを思いつきました。

夫人宅を訪れたマチルドは、黒サテン箱に入ったダイヤモンドの素晴らしい首飾りがいたく気に入り、その首飾りを借りて夜会に参加することにしました。

(以下原文よりの抜粋)

夜会の日が来た。ロワゼル夫人は勝利を勝ち得た。

彼女は誰よりも美しく、優雅で、愛嬌があり、笑

みを絶やさず、よろこびにあふれていた。

男という男が彼女を見て、名をたずね、紹介してもらいたかった。

……(中略)……

こうしてなみいる男たちの欲望をそそり、かくも完璧な成功をおさめるのは、女心にどれほど甘美なことであっただろう。

(以上原文よりの抜粋)しかし、そういう夢のような時間はあっという間に過ぎ去ってしまいます。

ロワゼル夫妻は帰りの馬車に乗り込み、悲しく家に戻ってきました。

彼女は盛装した自分の姿をもう一度見ようと鏡の前に立ち、突然叫び声を上げました。

フォレストイエ夫人に借りた首飾りがなくなっていたのです。

可能性のありそうなところはすべて探しましたが、どうしても見つけることができませんでした。

ロワゼルは、借りた宝石と似た宝石を3万6千フランで買う決断をしました。

そのために何人もの知人や高利貸しから多額の借金をし、身の破滅にもなりかねない契約も結びました。

(以下原文よりの抜粋)

ロワゼル夫人は、貧乏暮らしのおそろしさを知った。というのも、ここへきて彼女はヒロイックな決意をかためたのである。

巨額の借財を払わねばならないのだ。

そうとなれば、自分で払わなければ。

お手伝いには暇を出して、住まいを変え、屋根裏部屋を間借りした。

彼女は家事の荒仕事や、きたならしい台所仕事に手を汚した。

食器を洗い、油ぎった皿や鍋底を洗ってバラ色の爪をすりへらした。

(以上原文よりの抜粋)

夫妻は十年後、すべての負債を払い終えましたが、マチルドはすっかり老け込んでいました。

ある日曜日、気晴らしにシャンゼリゼを歩いていた彼女は、自分に宝石を貸してくれたフォレストイエ夫人に気づき、思い切って声を掛けます。

フォレスティエ夫人はマチルドの変貌ぶりに驚いた様子でしたが、マチルドはここで初めて首飾りをなくし、別のダイヤモンドを買ったことを伝えました。

そしてこの小説の最後は次のように締め括られています。

(以下原文よりの抜粋)

フォレスティエ夫人は足を止めた。

「わたしの首飾りの代わりに別のダイヤモンドを買ったのですって？」

「そうよ、気がつかなかったでしょう、ね？本当にそっくりだったから」

そう言って彼女は、得意げに、無邪気に笑った。

フォレスティエ夫人はひどく心を突かれて、友の両手を握りしめた。

「ああ、マチルド、どうでしょう！わたしのはイミテーションだったのよ。せいぜい 500 フランぐらいだったのに！……」

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

#### <コメント>

コラムでは、鈴木秀子氏の見事なコメントが続くわけですが、そこを割愛し、私なりの感想を書いてみたいと思います。

原作をお読みになった方は懐かしく思い出されたかもしれません。

しかし、読んでない人に、これだけの短い文章で、この小説の肝にあたる部分を抜粋紹介する鈴木秀子氏の編集力にまずは脱帽。

さすがと言わざるを得ません。

皆さんは何をどのようにお感じになったでしょうか？

マチルドの欲望を否定的に見るとらえ方もあるでしょう。

その場合は、ほらみたことか、とその後の展開に欲望に対する罰が下った、ととらえるかもしれません。

私は年を取ったせいか、若くて魅力的な女性がこのような欲望を持つことは、ある意味とても自然な流れのような気がしてなりません。もちろん未熟さはあるわけですが。

まず、夫のロワゼル氏は妻のそのような部分も含めて丸ごと愛していたという点がすばらし

いと思いました。

そして、一番のポイントは「首飾り紛失事件」が起きたことにどう対処したか、という点だと感じました。

正直に伝えずに違うものを買って対応したわけですが、事の是非は別として、いずれにしても大きな代償を払う決断をしたわけです。

心が決まるとその心の通りに境遇が動いていく、というのが、世の常ではないかと思えます。

10年間で失ったものよりも、得たものが大きいという点がフォレスティエ夫人と再会したときのマチルドの様子に表れていると感じました。

堂々と自分から声をかけています。代償を払った10年間の地に足のついた生活によって、過去の自分の未熟さをのり越えた証ではないでしょうか。

私たちにも、内容は違っても、瞬間瞬間に判断決断が必要な場面が、何度も何度もやってきていますね。

失敗を繰り返しながらも、どんな結果もしっかりと受け止めて、判断決断の質を高めていくことが、人生をより良くしていくことなんだろうな、と思わせてくれるコラムでした。

弊社のハモコミ通信添削チェックマンからは、鈴木秀子氏の感想を割愛するのはいかながなものか、とか、そもそも神聖なる家事を「きたならしい」などと書いているモーパッサンは何様だ、などという感想をもらいました(笑)。

読書の秋、皆さんも自由に味わってくださいませ。

~~~~~

#### < 編集後記 >

バンドネオンという楽器をご存じでしょうか？

一般的にはアルゼンチンタンゴで使われている楽器で、ずいぶん前に一世を風靡した「ランバダ」でもこの楽器の音色が良い味を出しています。

アコーディオンに似ていて蛇腹を引っ張ったり押ししたりして音を出す楽器です。

ところが両端には鍵盤の代わりにボタンのみ。しかもその配列がバラバラで、押した時と引いた時の音が違っていたりなど、悪魔の楽器と呼ばれているようです。

日本でも数少ないバンドネオン奏者渡辺公章氏は仙台在住。

氏の生演奏を2回聴かせていただき、先日はzoomで講話もしていただきました。

10月にはピアノとのコラボコンサート、11月にはソロコンサートが予定されており、芸術の秋、楽しんでみてはいかがでしょうか？

HPはこちら

<https://www.facebook.com/kimiaki.watanabe.bandoneonista/>

## ハモコミ通信2020年 10号②

<まちネタその1>

### ◎ 3つの言葉(藤尾秀昭氏「根を養う」より冒頭部を抜粋)

たまたま点けたテレビに高橋尚子さんが出演していた。シドニーオリンピックのマラソン競技の金メダリストである。彼女は自分を支えてくれた三つの言葉について語っていた。

- 1、何も咲かない寒い日は下へ下へと根を伸ばせ。やがて大きな花が咲く。
- 2、疾風に勁草(けいそう)を知る——強い風が吹いた時に本当の強い草が分かる。
- 3、丸い月夜も一夜だけ——いいことは長く続かない。常に満足することなく、次の一步を踏み出すこと。

高校時代の陸上部顧問の先生から教わった言葉だという。

事あるごとにこの三つの言葉を噛み締めることで、高橋さんの人間としての根は養われたのだろう。

(以下、省略)

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<コメント>

同じ言葉でも、誰から言われるか、ということが聴き手を動かすかどうかの分かれ目になることがありますね。

高橋尚子さんの場合、尊敬する陸上部の顧問の先生だったから、ことさら響いたのでしょう。

もちろん、同じ言葉を聴いた他の部員たちが、皆この言葉を噛みしめて覚えているわけではないでしょう。

彼女がいかにこの3つの言葉を日々の練習時に思い出し、自分を励まし続けたのか、年月を経て尚生きている言葉！すごい！

2の「疾風勁草」というのは、今まさにコロナ禍の困難な時代に、逆境を励みとしてがむしゃらに活路を見出そうと動き、その中から実際に這い上がってくる強い人、が想像されます。

「強い人」といっても、悲壮感は漂わず、明朗な心を持ち続け、笑顔でしなやかな強さを持った人、というイメージです。私の周りにも、そういう人が何人か思い当たります。

3は、おごりを戒めるとともに、「いいこと」が長く続かないのと同様、「悪いこと」も長く続かないことをほのめかしていますね。

さらには、真ん丸だけが「良い」のではなく、実はすべての形が「良い」と捉えられないだろうか？というオール肯定思考を引き出してくれます。

やるべきことはただ1つ。1の「根をしっかり張ること」に日々一生懸命取り組む。これしかありませんね。

<まちネタその2>

### ◎ 謙虚に学ぶ姿勢

古くから伝えられてきた技術や芸能などにおける手法を「流儀」といいます。

職場にも流儀をもって業務に臨む人がいるでしょう。しかし、流儀にこだわりすぎると、自分本位の頑(かたく)々な姿勢に陥ってしまうことがあります。

室町時代の申(さる)楽師の世阿弥は、申楽の芸術論を述べた秘伝書『風姿花伝』に、「上手は下手の手本、下手は上手の手本なり」と記しています。

職場にたとえるなら、上司が部下の手本になるということは、これまでの勤務年数や、人生経験などからいっても、当然そうあるべき姿といえる

でしょう。

『風姿花伝』ではさらに、上司が部下を手本として学びとる「謙虚な姿勢」を持つことの大切さを教えてくれているのです。

人は皆それぞれ生まれ持った長所や個性があります。生まれ育った環境や経験の違いから、上司には上司の、部下には部下のそれぞれの持ち味があるものです。

まずは、相手の長所に目を向けることから始めてみましょう。

謙虚に学び、柔軟な姿勢で仕事の流儀を確立し、職場を活性化していきたいものです。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

#### <コメント>

経験を積んでくると、確かに自分の流儀が確立されてきます。それが磨かれれば磨かれるほど、そこにこだわる自分がいます。

芳村思風先生の言葉「答えを持ちつつ、答えにしばられない」というスタンスが大切だなあ、と思い起こされました。

ものごとを見る方向が違ふとまったく別物に見えるわけで、いつも同じ方向からばかり見ている（自分流儀を通そうとする）と進歩が止まるわけですね。

人って「いろいろ」だよな、とひとくくりに「いろいろ」で済ませてしまうとそれで終わり。どう「いろいろ」なのか？

具体的に相手のいいところを言葉にして伝える、という簡単そうでむずかしいことを、今、社員研修でやっています。

研修だからできることを、日常の中でも自然に当たり前のようにできるようになりたいものです。

~~~~~

#### < 編集後記 >

舗道の雑草をむしっていると、その植物の戦略が見えてきます。

根はほどほどに上を充実させるタイプ、根はしっかりしているが比較的根こそぎ抜きやすいタイプ、途中で根本が切れてしまうタイプ、そして最強はものすごい根っこ群を構築しているタイプ。

私の少ない体験からですが、ヨモギに似た外

来種のヒメムカシヨモギというのがうちの近所では最強です。

根っこは非常に強靱で、根っこごと抜いたつもりでも、その下にまだまだ本体が隠れているのです。

上からは太陽の応援、下からは土の応援をいただき、アスファルトを剥がすほどの力です。

せめて会社の周辺域だけでも、と奮闘中です（笑）。

## ハモコミ通信2020年 11号②

### <まちネタ>

### ◎ 迷わない生活

今年は感染症拡大の対策のため、職場は元より、日常生活にも多くの判断を強いられ、その選択に迷った一年ではなかったでしょうか。

しかし、こうした状況に限らず、私たちは日々「迷う」という場面に出合っています。

判断できないことが原因で、チャンス逃すこともあります。

では、なぜ迷うのでしょうか。

それは何らかの選択をする際に、その選択肢の片方が、正解や成功である、という前提になっているからでしょう。

《 間違いや 失敗をしたくない 》という心理が、迷うことにつながっているのです。

それならば、その前提を取り払ってみるのです。

どれを選択しても、その後のことはすべて、「必要があるからこそ起こる」と考えてみてはどうでしょう。

例えば、一見、不正解のように思える選択も、「自らの成長のため」と捉えれば、迷いはなくなるのではないのでしょうか。

《 どのようなことも、すべて受け入れよう 》という心境を目指して、胸を張って堂々と、あらゆる事柄に向き合っていきましょう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

### <コメント>

これは深いですね。

どれを選んでも正解！

いや、正解も不正解もない、そこから創って  
いくのだ！

そういう気構えを常に持っていれば心が軽く  
なりますね。

これ以上コメントは不要だと思います。

やりましょう！

~~~~~

<まちネタ>

### ◎ ここが最良の場

皆さんは今、楽しく喜んで自分の仕事に取り組  
んでいるでしょうか。

いろいろな事情や理由で、そう思えないことも  
あるでしょう。

ノートルダム清心学園で長く理事長を務めた  
故・渡辺和子氏の著書『置かれた場所で咲きなさい』  
の一節に「置かれた場に不平不満を持ち、他人  
の出方で幸せになったり不幸せになったりしては、  
私は環境の奴隷でしかない」とあります。

続けて、「人間と生まれたからには、どんなとこ  
ろに置かれても、そこで環境の主人となり自分の  
花を咲かせようと、決心することができました。

それは『私が変わる』ことによるのみ可能で  
した」と記しています。

確かに植物はどのような場所でも、そこで精一  
杯、花を咲かせ実を結びます。

日々の仕事において私たちは、自分の立場や役  
割を自覚し、業務に一杯、精一杯取り組むこと  
が肝要でしょう。

つまり、「今、ここが最良の場」と受け止めるこ  
とが大切なのです。

すべての事柄に無駄はなく、今している経験は  
将来の宝となるに違いありません。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<コメント>

最初のコラムに通じるものがありますね。

これもほとんどコメント不要な感じです。

「今、ここが最良の場」

本当にそう思えるか、思えないとしたらなぜ

なのか。

自分は変わる必要がない、自分以外のすべて  
が自分に都合のいいように変わってほしい、そ  
ういう深層心理に注意したいものです。

自分の人生のオーナーになるために必須の考  
え方「今、ここ」、体得したいですね。

~~~~~

< 編集後記 >

20年前に立ち上げた地元のおやじの会が今も  
続いています。

しばらく活動には携わっていませんでしたが、  
20周年記念イベントがあるからぜひ、と誘われ、  
「裏山で遊ぼう」という企画に参加させていた  
だきました。

小学生たちの純真な反応に心が洗われました。

## ハモコミ通信2020年 12号②

<まちネタ>

### ◎ 走りと名残

日本の和食文化では、食材が一番おいしい時期  
を「旬」といいます。

旬よりも早く出回ったものを「走り」、旬が過ぎ  
たものを「名残」と名づけて、季節の移ろいを感じ  
てきました。

旬の食材は、体に必要な物を与えてくれるとい  
われます。

例えば、冬が旬の野菜には体を温める成分が多  
く含まれ、夏野菜には体に蓄積された熱をクール  
ダウンしてくれる栄養素が豊富に含まれます。

江戸時代から、初がつお、初きのこ、初なすとい  
われるように、「走り」にあたる食材は人気を呼び、  
高値で取引されています。

旬を過ぎた「名残」の料理は、去り行く季節を惜  
しみつつ、来年も出会えることを願い、感謝して  
食しました。

日本の和食は、平成 25 年より「日本人の伝統  
的な食文化」として、ユネスコ無形文化遺産に登  
録されています。

世界的にも誇れる和食文化を後世に受け継いで  
いきたいものです。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<コメント>

「走り」「旬」「名残り」いい響きですね。

私の大好物の牡蠣は、まさに今が旬。

牡蠣の場合、年を越した方が旨味が増してきて、名残りに近づく2月3月が本当の旬だ、という説もあります。

事実そう実感してきました。

しかし…

今年は海の状態が非常に良いようで、「すでにたっぷり旨味が備わっているよ」と地元漁師が太鼓判。

どれどれ…おおおおお！

これだっ、間違いなし！

南三陸町歌津の牡蠣、最高の出来でした！！

私が応援している漁師さん（高橋家）の牡蠣は本当に最高なのです。

毎年最高ですが、今年のは特にスバラシイ！舌がとろけます（笑）。

好きな方はぜひご一報くださいませ（連絡先お知らせします）。

こんなに美味しいのに、コロナ禍でダブつき気味なのだそうです。

ぜひ応援がてら取り寄せて味見してください！ お願いします。

ホタテもありますよ。

~~~~~

<まちネタ>

## ◎ 地球と人類の共存

月旅行から、月や火星移住までもが、夢物語ではないといわれる昨今です。

もし、大気圏外から地球を眺めることができたとしたならば、どのような気持ちになるのでしょうか。

1969年にアポロ9号で、地球を151周したラッセル・シュワイカート氏は、船外活動をする際にトラブルに見舞われ、5分の間だけ、一人で宇宙空間に浮かぶ体験をしました。

それは彼の人生の中で、最も充実した5分間でした。

そこでは、完全な静寂に包まれ、眼下には美しい青い地球が輝いて見えました。

エゴが消失した何ともいえない瞬間でした。

そして、人間という種と地球との関係をもっと深く考えなければならぬと、強く思ったそうです。

地球は一つの大きな生命体であるといわれる「ガイア仮説」に非常に共感できたともいいます。

宇宙体験は誰もができるものではありませんが、地球に暮らす私たちは、大自然がつくる美や神秘に、地球の生命を感じることができるのではないのでしょうか。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

<コメント>

年末年始には、1年の計を立てる方が多いと思います。

仕事はもちろんのこと、家族のこと、健康、お金、趣味、友人との過ごし方、何事かの追求探究などなど、多岐にわたって真っ白から描いてみたいですね。

その際、目の前の現実にはばかりとらわれすぎないように、時間的には長い期間に、空間的には地球・宇宙レベルまでにイメージを広げて、夢想するところから始めたいものです。

悠久の時の流れの中のほんの100年、広大な宇宙空間の中の小さな自分、それをイメージの上で自在に伸び縮みさせて計画づくりを楽しみたいです。

それにふさわしい場の準備と、ほんのちょっとした旨酒があればバッチリです（笑）。

そのためにも、「今、ここ」に集中して、必ずそういう時間を取り分けるのだ、という強い意志で、目の前のことを汗だくで乗り切っていきたいものです。

~~~~~

< 編集後記 >

いよいよこれが2020年最終号です。

今年も24回、無事に配信することができました。

それもこれも読んでくださる方がいるおかげです。

一人ではとても書けません。

あたたかい励ましのメッセージも数多くいただきました。

本当に有難いことです。

心より感謝申し上げますとともに、皆様が安寧で幸せな年末年始を迎えられますよう、ご祈念申し上げます。

来年もハモコミ通信ならびに壱岐産業をお引き立てのほど、どうぞよろしく願いいたします。